

## 宇宙的な抱擁

(Tagesanzeiger.ch / 2019年5月9日掲載)

<https://www.tagesanzeiger.ch/kultur/kunst/kosmische-umarmung/story/23863533>

ベルリン在住の日本人アーティスト・イケムラレイコは、自身の作品の中に東洋と西洋、双方の伝統を結びつけている。バーゼル美術館での展覧会の印象を伝える。

(画像：横たわって・黒、1998/99。写真：豊田市美術館 ©Pro Litteris, チューリヒ, 2019)

レポート：クリストフ・ハイム (Christoph Heim)

現代の聖母像のように思えるそれは、イケムラレイコによる青さびのついた青銅製の巨大な彫刻である。バーゼル美術館・新館にある光の中庭に設置されている。約700キログラム、「うさぎ観音」と名付けられたその作品は、うさぎの耳を持った少女が泣きながら祈るように手を合わせている。胴体部分の下は鐘のような形のスカートになっていて、無数の穴に覆われ、前面にはドアのような開口部がある。

この少女なる母、もしくは母なる少女は、2012年から2019年にかけて制作された。それまでのイケムラレイコの作品に比べるといくぶん写実的であるように見える。この彫刻作品にはヨーロッパとアジアの伝統が結実している。守護を約束するこの哀しみの獣人像は、とりわけ仏教のなかで描かれる菩薩像を思い出させることだろう。

## 始まりはシュルレアリスティックだった

イケムラレイコがノイエ・ヴィルデのスタイルをとった、固く、攻撃的にも思えるドローイングで有名になったのは、すでに1980年代のことだ。当時、まさにシュルレアリスティックな画風で彼女が格闘していたのは、自身の夢や日常、政治といったことがらだった。それらはぐじゃぐじゃとした線で鉛筆画や木炭画のなかに描き出されている。ドローイングで描かれた想像の世界はバーゼルでの展覧会でも多くの展示場所が割かれているが、絵画にも散発的に見受けられる。尖った足でこちらへ向かってくる、4匹の大きなタランチュラが行進しているような絵が展覧会の第一室に掛けられているが、まさに恐ろしさを感じさせる絵画である。この大蜘蛛はいったい凶事の前触れなのか、それとも美術館の所蔵作品を守る見張り人なのかと観覧者は思うことだろう。

イケムラは1951年に東京の近くに生まれ、日本で学業を修めた後、1970年代に渡欧。セビリア（スペイン）の美大に学んだ。その後チューリヒへ移り、1980年代中盤にはケルンへ移った。1991年にはベルリン美術大学の教授に招聘された。

## 心地よいグラウビュンデンの谷

スイス・グラウビュンデン州トゥージスの険しく切り立った谷で1989年から1990年にかけて制作されたのが、シリーズ作品となる「アルプスのインディアン」だ。10点の風景画からなり、なかでも特に傑作の3点をバーゼルの展覧会で見ることができる。この中規模サイズの作品群は山地の風景と人物が多様な色使いのなかに溶け合い抽象画のようにも見えるが、ドローイングに比べ、驚くような調和と柔和さを見せている。おそらく画家自身もこの山地に身を置くことで心の平安を感じ、風景が自身と自身の絵画へ心地よさをもたらすことを発見したのだろう。

自然風景は彼女にとって欠かすことのできないテーマとなり、なかでも近年ベルリンで制作された三枚セットの大きな作品は、彼女の作品においてとりわけ重要なものとなった。イケムラレイコの風景画に描かれる、人のような人でないような存在は、風景とまさに不可思議な統一感を獲得している。それはイケムラが紡きだす神話の証左であり、その神話は彼女の次の作品へと織り込まれていく。

イケムラの芸術のなかには複雑な統合プロセスを見ることができると、一般的には言うことができるだろう。外と内、人間と動物、そして様々な文化的な伝統が、きわめて独自性の高いかたちで溶け合っている。これこそがスイス国籍を持つこの日本人女性アーティストが追求しつづけることがらなのだ。彼女はヨーロッパで文化的・芸術的解放をもたらす土壌を探し求め、見いだした。しかし本人が言うように、ヨーロッパに同化しようとすることはなかったのだ。

## 無から何かを生み出す

イケムラの絵画が持つ繊細さと優しさは、見る者に軽くふれ、なでていくような魅惑的な印象を与えると同時に、甘ったるいと思わせるようなところもある。このことを取り上げる前に、ほとんど目立たないあるドローイングについて書いておきたい。「始源」と名付けられたこの一枚は軽いタッチの平面的な木炭画だ。描かれているのは丸いかたちと、そこから絵の端に向かって長く伸びる二つの耳である。我々が見学した際にイケムラレイコが語ったのは、当初は耳を描くつもりは全くなかったのだということだ。それより丸いかたちから初めに外側へ折り返していったのであり、いちばん最初の動きであり創造プロセスの結果であったということだ。ある意味での「無からの創造」である。イケムラは人間の本质や本質的なかたちを追求するアーティストであり、彼女の制作方法は時折神性をも帯びることがあるのだ。

このようにかたちを追求して獲得していくやり方は、焼成陶器の彫刻作品にも引き継がれている。1990年代に制作されたこれらの作品は、バーゼル銅版

画館館長であるアニータ・ハルデマンにより、黄緑色の土台の上にすばらしく展示されている。おもちゃの人形や花瓶くらいの大きさであり、その風変わりなかたちは、一義的に解釈されるのを拒んでいるかのようだ。人間や動物になろうとしている最中の何かであるように思える。そのはかないかたちは、まだ花瓶であることを示す開口部を持ちつつも、すでに人間に似た生き物の世界へと移って行ってしまったようにも見え、その顔はそれとなく、しかしきつと全くの偶然ではないだろうが、日本のマンガの登場人物を思わせるものだ。

### すべてはまだ萌芽の途上

そのような連想はイケムラレイコの少女を描いた絵画を見ているときにも現れてくる。主に原色を用いた作品群「ガールズ」では、透けて見えるような若い女性がキャンバスの中に息づいている。多くは顔が描かれておらず、歩いていたり寝そべっていたり、ときには跳ねたりもぐったりしていることもある。若い女性を描いたこれらの魅惑的な絵画は、彼女らの生がまだ萌芽の途上にあると語りかけてくる。すべては約束されている。そして彼女らは永遠に繊細な存在でありつづけるのかもしれない。世界から転落するのか、それとも宇宙的な哀しみにうち沈んでいるのか。

バーゼル美術館にて、展覧会開催は5月11日から9月1日まで